



小説家の小説論

安田昌太郎

1970

河出書房新社

小説家の小説論 ©1970

初版印刷 昭和四十五年十月二十五日

初版発行 昭和四十五年十月三十日

定価 八八〇円

著者 安岡章太郎

装幀者 芝本善彦

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三一六

電話東京二九二局三七一一(大代表) 振替東京一〇八〇二

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

製本は入念に致しておりますが

万一、乱丁・落丁・汚損のございます時は

最寄りの書店・本社にてお取替を致します

目次

作家論

志賀直哉

谷崎潤一郎

佐藤春夫

梶井基次郎

井伏鱒二

小林秀雄

石川淳

高見順

7

40

62

81

86

118

124

128

梅崎春生

146

庄野潤三

162

吉行淳之介

171

阿川弘之

200

遠藤周作

207

山川方夫

211

文芸時評 一九六九年

一月～十二月

231

小説家の小説論

作
家
論

志賀直哉

I

阿川弘之がアメリカへ留学に出掛けたのは昭和三十年の秋だから、これは十年以上もまえのことだ。そのころ阿川は南町六丁目の、青山墓地に向かい合った北斜面の崖の中腹の小さな家に、細君と二人の子供と一匹の赤毛の犬とで暮らしていた。たずねて行くと、いつも高い石垣の下につながれている赤毛の犬が、ウサン臭げにこちらを見上げ、石段を一步でも下りかけると待ち構えたように吠えつので、私は崖の上から阿川の名を「おーい、おーい」と助けを求めて呼び上げた。

この犬のために私は、相当低姿勢にならされるのであるが、お世辞気味のことを言う傾向があった。

「いつ見ても好い家だね、この家は……。おもむきがあつて、なかなか好いよ。それに、じつに静か

だ」

すると阿川は、くすぐったそうに笑い、「それがこのごろ、あんまり静かでもなくなった。なにしろ志賀先生に常磐松にひっこしてこられちゃったんでねえ。とにかく『夜討ち、朝駆け』たいへんだ」

そう言われても、私にはちょっと何のことかわからなかった。要するに阿川は、最近熱海から東京へ出てこられた志賀先生に朝な夕なに呼びつけられて、オコられたり、用事を言いつけられたりして、こまるというのだろう、と思った。

「ところが、それが逆なんだ。じつは昨日も朝早く、犬がさかんに吠えるんで、ウルサくて寝てられないから犬を叱るつもりで飛び出して行ったら、崖の上から『阿川くん、阿川くん』と呼ぶ声があるので、出てみたら志賀先生じゃないか。びっくりしたよ……」

志賀さんが、何年ぶりかで東京の足場のいい所に住居をうつされてから、気軽にあちらこちらと歩いて、戦後の街の変わりように驚いておられるということは、私も何かで読んで知っていた。しかし、それが阿川の朝寝を脅かすことになっていたとは意外であった。

「志賀さんも、よっぽど退屈なんだな。それとも、もうお年だから早く目が覚めちゃうのかな」

「そう、ご自分でも言っておられたよ。『このごろは目が覚めると、じっとしてられない』って。もう先生も七十三だろう、むかしなら大変な爺さんだよ」そう言いかけて阿川は「しかし君、まさかよ

そへ行つてヘンなことを言いふらすんじゃないだろうな。阿川は、このごろ毎朝、志賀さんに叩き起こされて閉口してゐるなんて」

「いや言うよ。これは面白い話だもの。君が志賀さんのまえで、直立不動の姿勢で訓戒されたり、海軍体操をやらされたりしてゐるって言えば、みんなが喜ぶ……」

阿川に「瞬間自動湯沸し器」というアダナをつけたのは吉行淳之介だが、このときも阿川は正確に一瞬のうちに頬から額まで赤くなり、眼蓋を固くひきつらせるようにして、

「おい冗談にもそんなことを言つたら、承知しないぞ……。おれが困っているのは、そういうことじゃないんだ。本当のところ志賀さんが、おれの寢坊を叱ってくれるんなら、こつちも気がラクなんだ。ところが先生は、そういうことをとても細かく気を使われる。それがよくわかるから、こちらはツライんだ。他人の生活をディスターブすることが先生は、シンからお嫌いなんだ。自分も人から束縛されないかわりに他人にも何も強制はしない。そういうモットーというか、信条を、じつに徹底的に実行してこられたからだ。だから朝早く、ぼくのところへ散歩に来られるときでも、ぼくが眠そうな顔をして出て行くと、先生はじつに困つたような、申し訳ないような顔をなさる。そのときの、おれの気持……」

「わかった、わかった。もう言わないよ、きみが志賀さんに海軍体操をやらされてゐるなんてことは……」

正直に言って、私はこの話に、いろいろの意味で感動した。阿川の困惑ぶりもだが、志賀さんが彼の家のツマラない赤犬に吠え立てられて、崖の上から「阿川くん」と呼んでいるところは、なんだか戦後を象徴した戯画のようだった。

終戦を告げる天皇のお声をラジオで聞いたときから「戦後」がはじまったわけだが、あれ以来、私たちはいろいろの人の地声や、いろいろのものの素顔に一挙に接することになった。われわれの住んでいる街を敵の空襲で焼きはらわれたのは無論、恐ろしい体験だった。しかし焼けただれた東京の街中を歩いてみて、はじめて私たちはこの都市の地勢を知ること出来たのである。

実際あのころは、意外なところから意外なものが、よく見えた。渋谷の百軒店から代々木の練兵場が見渡せたり、神田明神の石段が国電の窓からパツと眼にうつったり、そんなことがよくあった。おもわぬものが自分のすぐ近くにあったという驚きは、土地や建物だけではなかった。朝日新聞の投書欄に「特攻隊の再教育」についての意見が出ているのを読んで、（志賀直哉『著述業』）とあるのを見たときなんかに、それに似た驚きをおぼえた。つまり、それは銭湯や田舎のバスのなかなどで、白いアゴひげの爺さんから話し掛けられ、あとで考えたら、それが「暗夜行路」の著者だったといった感じだ。

「灰色の月」を読んだときは、これとは全然逆の性質のショックを受けた。——「東京駅の屋根のな

くなった歩廊に立っていると、風はなかったが、冷え冷えとし、着てきた一重外套でちょうどよかった。連れの二人は先に来た上野まわりに乗り、あとは一人、品川まわりを待った。(略)人が少なく、広い歩廊が一層広く感じられた」この書き出しを読んだとき、私はどういふわけか、その主人公に時任謙作の風貌をごく当然のことにように想像した。というより私にとって志賀直哉は時任謙作の別名であり、大津順吉はその幼名だったのだが、それにしても、この「灰色の月」は、同じころに発表された志賀さんの他の文章とどこか違ってドラマチックな緊張感があった。読みながら私は「暗夜行路」の前編で、謙作が、お栄と別れて横浜から汽船で神戸に向かうところを、ほとんど無意識に憶い出し、デッキに立って一人で夜の海のうねりを眺めている謙作が、いつの間にか東京駅の屋根のなくなったプラットフォームで、「薄曇りした空から灰色の月が日本橋側の焼跡をぼんやり照らしている」光景を見つめているようなツモリになっていた。だから、

「昭和二十年十月十六日のことである」

という末尾の一行に、まったくギクリとさせられた――。これは無論、私の勝手な想像と錯覚からきた驚きで、全然普遍的なものではない。おそらく私は、屋根をモギとられた、ひと気のない駅の歩廊のダダっびろさと、夜の無人の客船の甲板とを簡単に混同してしまっただけであり、別段、祖父の妾だった女性に気持を傾けている「暗夜行路」の青年の荒廃した心裡と、無残に焼け落ちた敗戦国の首都の眺めとを、対応させて考えたわけではない。しかし「灰色の月」には、語られている内容と別

に、なにか終熄そのものを暗示するような悲痛なひびきが感じられた——。垢だらけの、頸筋の細い少年工が、山手線の電車の板張りの座席に腰かけたまま体を揺すぶっているのを指して、誰かが小声で、「二歩手前ですよ」という。いったい何が一步手前なのか？ 具体的には何のことかわからない。しかし、この文章の一行一句は言外に、まちがいなくある怖ろしいものの「一步手前」にさしかかった不安を語りかけていた。

餓死の一步手前、発狂の一步手前、嘔吐の一步手前、人間が動物に堕ちる一步手前、要するにそのころの私たち全部が、こういった何かの一步手前で危うく自分自身をささえていた。「灰色の月」は発表の当時、そういう危機感の象徴であり、敗戦の記念碑だとも言われた。いま読んでみても、たしかにその通りだと思う。そして私たちは、その一步手前の危機を何となく乗りこえて今日にいたっているはずだが、私は果して、それを乗りこえて来たのだろうか、それとも危機の方で勝手にどこかへ姿をくらましてしまったのだろうか？ 一つだけハッキリしていることがある。それは志賀直哉氏が「灰色の月」以後、二度とこのように心の緊張をジカに反映させた文章を発表されていないことだ。

II

ところで、阿川が志賀先生の朝の散歩に悩まされているという話をきいて、何日かおいてある日、また彼の家を訪ねてみると、めずらしく例の赤犬が吠えついてこなかった。犬も多少は礼儀を心得て

きたのかと思ったが、そうではなく、阿川が犬のそばに自転車をつひっぱり出してしきりにチェーンかタイヤの具合かをしらべているところだった。阿川は私の顔を見ると、

「これから志賀さんの家へ行くところなんだ。よかったら君も一緒に行かないか」と言った。

「……」私は、狼狽を感じ、咄嗟に口ごもって返辞ができなかった。

「どうなんだい、君はこれからどこかへ行く用事でもあるのか。別に用がないのなら一緒に行こう」と阿川は、れいによってセカセカした口調で繰りかえした。

私は、その日は何も用事はなかったし、仮りに多少の用があつたとしても、それを後廻しにしてでも志賀さんのお宅へは行ってみたかった。けれども一方では、自分はどうして志賀直哉氏のところへ行ってみたいのか、それがハッキリしなければ、行けないという気が何となくした。——こういうと、さも私は慎重な遠慮深い男のようであるが、そうではなく、誘われれば何処へでも行って、知らない人のところで泊まりこんできたり、先輩作家を訪問したことも何度かあつて、たとえば井伏鱒二氏のところへはY君にたのんで連れて行ってもらつた。それに、これは引き合ひに出すのもヘンな話だが、学校を出てブラブラしていたころには、現職の大臣の家へ就職をたのみに出掛けて断わられて帰つて来たこともある。——これに較べると、阿川と一緒に志賀さんの家へ行くことは、まったく何でもないことだ。しかし、この時の私は普通なら何でもないことが、なんとなく気になった。

たとえば自分は、この間、阿川が志賀直哉に海軍体操をやらされている、などとツマラぬ冗談を言

った。あれは何でもないことだったろうか？ それに自分は阿川が咳やタンをするたびに、「このごろ君はタンの吐き方まで志賀さんそっくりになってきたそうだね」と言わずにいられなくなる。こんな気持ちになるのも、何でもないことなのだろうか……？ しかし私が、そんなことを考えている間に、阿川は奥さんに命じて小型の座布トンを運ばせて、それを自転車後の荷台に縛りつけ、

「おれの自転車は、そのへんのタクシーに乗るより、ずっと安全だぜ」と言った。つまり彼は、私をその自転車に積んで走る気らしい。

「おいおい、それはダメだよ」私が、あわてて手を振ると、「怕いかい、やっばり……」と、阿川は私の顔を覗きこんでニヤリと笑って、「じゃ、タクシーを拾って行こう。ここから常磐松までなら八十円か百円だよ。オースチンかヒルマンの新しいやつが走っているから、そいつに乗ろう」

それで万事きまった。——道々、阿川は前に一度、井伏さんと庄野潤三とを案内して、熱海の志賀さんの家へ行ったことがある、と言った。そのとき、庄野は大体ふだんと変わらない調子で志賀さんと話をしたが、井伏さんはいつともとは別人のように固くなり、志賀さんに何か訊かれてもロクに返辞もせず、とうとう何時間もいた間、一と言も口をきかずに帰ってしまったというのである。「いったい、どういうことなんだろうね——？」阿川は、想い出してもフシギだというように、頭をひねってみせながら訊いた。しかし私にも、志賀さんの家へ行くのは、阿川の自転車に積まれるのとは違った意味の怖さはある。じつをいうと、その話はまえに井伏さんから直接聞いて知っていた。